

はじめに

神楽というと、初めて愛知県奥三河の花祭を訪れたときのことを思い出す。

祭もたけなわとなる夜半に幼子たちによって舞われる花の舞のころになると、舞処は見物衆で埋めつくされる。そのころ突如恐ろしい形相の鬼が舞処に闖入する。神鬼の庭入りである。人々は待ちかねていたとばかりに、声をかぎりに囃し立てる。神鬼は自分の伴鬼ともおにをともなっているが、酒に酔った彼らはときにマサカリを振り回して暴れまわり乱闘を繰り広げたりする。危険極まりないのだが、気が付くと舞処に飛び出して、村人たちとともに狂喜乱舞していた。神楽の渦を巻くような荒ぶる力は、われわれの日常性を切り裂いてカオスの中に叩き込みそして再生させるのだ。

神楽はよく「伝統芸能」などと呼ばれる。しかし山間部などに伝承される古い神楽は、日本文化についての解釈のステロタイプに書き直しをせまるものである。

こうした神楽についての研究は、昭和初年に三信遠の神楽が折口信夫や早川孝太郎らによって見いだされたことに始まる。しかし彼らは、神楽の本当の主役たち、すなわち土公神どこうじんや荒神こうじん、大将軍神など、神楽祭儀や祭文類の中に生き残っている中世的な神格にあまり注意をはらってはいなかった。

こうした現実は一九八〇年代の「中世ルネサンス」ともいうべき状況によって打ち破られる。これまで荒唐無稽で一顧の価値もないとみなされていた、中世の日本書紀注釈のテキスト群が「中世日本紀」として再定義され、その世界に照明が当てられるようになった。そして、こうした中世の神仏習合思想によって解釈された「中世日本紀」「中世神道」「本地物語」などのテキスト群にたいして、中世的な世界観・宇宙観を構想するものとし

て「中世神話」という新たな概念が提起された。

この時期の神楽研究においては、岩田勝、山本ひろ子の功績が大きい。岩田は広島県の比婆荒神神楽の中世神楽としての性格を明らかにし、またこの地の神楽祭文を研究して中世の神楽祭儀の解明を行い、「浄土神楽」という新たな概念を提起した。山本は花祭の前身である大神楽の「白山浄土入り」の中世的な宗教世界を明らかにし、大神楽・花祭の「花の祭文群」の解明を行なった。

そして一九八二年の小松和彦の『表霊信仰論』発表以降の高知県のみざなぎ流研究の進展は、祭文とその宗教世界、そしてそれを用いた祈禱の実修へ研究者の関心を高めていくものであった。

だが今日、なお「神楽・祭文の研究」は立ち遅れていると言わざるをえない。

近代は「始源」をその写し絵としての「古代」に求め、そこから「日本の伝統」といった物語が造り出された。そうであるがゆえに、中世研究は近代のわれわれの価値体系を相対化し問い直すことをせまるのである。神楽・祭文研究はその最も重要な分野の一つに他ならない。

本書では、こうした祭文研究の道標となるべく、中世密教・陰陽道の知見をふまえ、各地の神楽の現場から祭文実修のあり方を明らかにしようとした。幸いなことに東アジアをふくめて各地の神楽（祈禱）と祭文について、ベテランに若手研究者も加わり意欲的な研究を集めることができた。

本書が神楽と祭文の研究にとつての新たな議論の可能性を拓くものとなれば幸いである。各方面の建設的な批判を乞いたい。

二〇一六年十一月吉日

井上隆弘

はじめに

総論 神楽・祭文研究の現在と課題…………… 3

神楽編…………… 井上隆弘 5

祭文編…………… 斎藤英喜 27

各章の概説…………… 斎藤英喜 39

井上隆弘

I 陰陽道・密教・中世神話・アジア

第1章 陰陽道祭文の位置——『祭文部類』を中心に…………… 梅田千尋 47

一 陰陽道祭文の成立と展開 48

二 『祭文部類』の神々 54

第2章 五形祭文と五蔵曼荼羅…………… 阿部泰郎 70

——中世日本の宗教的身体論の系譜——

一 花祭と神楽における「五形祭文」 71

二 「五形祭文」の地平——修験寺院と顕密寺院の聖教—— 77

三 五藏曼荼羅と五藏音義——顕密仏教の宗教的身体論の系譜—— 80

第3章 大土公神祭文・考——曆神たちの中世神楽へ——……………斎藤英喜 93

一 『篋篋内伝』のなかの「五帝龍王」譚 95

二 奥三河「大土公神経」——世界を建立する神—— 99

三 いざなぎ流「大ビツクの察文」^(祭文)——祭文と法文—— 104

第4章 牽かれゆく神霊……………北條勝貴 116

——東アジアの比較民俗からみる死者の浄化——

一 浄化手段としての牽引——成巫譚から浄土神楽へ—— 118

二 「指路経」における〈道行き〉の意義——浄化と移動—— 125

II 生成する祭文の世界

第5章 神祇講式を招し祈らん……………星 優也 141

——藺牟田神舞「切利の法者、切利の小神子」をめぐつて——

一 藺牟田神舞をめぐつて 143

二 変貌する『神祇講式』 151

三 藺牟田神舞における『神祇講式』 157

第6章 奥三河の宗教文化と祭文……………松山由布子 168

一	奥三河の花太夫と病人祈禱の祭文	169
二	『牛頭天王嶋渡り祭文』と津島社	171
三	『御歳徳神祭文』と奥三河の疫神信仰	174
	物語化する祭文……………	神田竜浩
		186

第7章

	——日向琵琶盲僧の釈文「五郎王子」の事例から——	
一	九州の琵琶盲僧と永田法順	187
二	五郎王子とは何か？	190
三	琵琶盲僧の釈文「五郎王子」	193
四	釈文「五郎王子」についての考察	202

Ⅲ 中世神楽の現場へ

第8章	静岡県水窪町草木霜月神楽に見る湯立ての儀礼構造……………	池原 真
		209

——「玉取り」と「神清め」——

一	草木霜月神楽の概要	212
二	玉取り	215
三	玉取り儀礼の意義	218
第9章	「浄土神楽」論の再検討……………	鈴木昂太
	——『六道十三佛之カン文』の位置づけをめぐる——	233

第10章

- 一 『六道十三佛之カン文』の所蔵元栃木家について 234
 - 二 『六道十三佛之カン文』の儀礼構造 237
 - 三 梓巫女の口寄せ儀礼との比較 246
- いざなぎ流「神楽」考——米とバツカイを中心に——……………梅野光興 257
- 一 神楽の章 259
 - 二 神育ての章 266
 - 三 バツカイの章 270

第11章

- 一 山の神祭文と神楽祭文——狩狐祭文の解釈をめぐって——……………永松 敦 284
- 二 神楽に勧請され祭られる神々は何か? 285

- 二 神送りと火の神、竈の神 297

第12章

- 一 九州における神出現の神楽と祭文……………井上隆弘 306
- 一 「神体出現の神楽」 306

- 二 九州南部の神出現の神楽 309

- 三 宮崎県の椎葉神楽における荒神と祭文 314

- 四 鹿児島県の蘭牟田神舞における荒神と祭文 318

〔研究ノート〕

青ヶ島における中世的病人祈禱祭文といざなぎ流との関係について

..... ジェーン・アラシエフスカ 324

(ブレモセリ・ジオルジョ 訳)

一 伊豆諸島南部にある青ヶ島 325

二 神様拌みの指導者 326

三 青ヶ島の祭文 329

四 祭文を使った病気への対処 333

〔資料翻刻と解説〕

対馬の新神供養——「綱教化」と「提婆」を中心として——..... 渡辺伸夫 342

あとがき

総論 神楽・祭文研究の現在と課題

斎藤 英喜
井上 隆弘

はじめに

近年は「神楽ブーム」ということで、列島の山深い村々や海辺の町で演じられる神楽に多くの観光客やアマチュアカメラマンたちが押しかけている。そこでは山村に生きる人びとの素朴な信仰や、山や森などの自然に息づく神々と交感する民俗芸能といった言説が、今も流通している。神楽研究が、「古代的」「民衆的」といったキーワードで論じられる現状にあることを映し出していよう。

しかし一九八〇年代以降に、神楽研究のなかであらたに注目されたのが、「中世」の神楽の実態である。おもに中国地方神楽を対象とした岩田勝や、奥三河の花祭、大神楽をめぐる山本ひろ子などの研究を起爆剤にして、これまでの「古代」の原型・祖形を求める神楽研究を塗り替える、新しい「神楽」の中世的儀礼世界の研究がわれわれの前に顕現してきたのだ。

とりわけ、「浄土神楽」「荒神神楽」の実態は、従来の「修験系神楽」という視野をさらに押しひろげ、中世の神仏習合の信仰世界と神楽とがぶつかり合う、ダイナミックな儀礼現場へと導いてくれ、荒神、土公神どこうじん、牛頭天ごずてん

王^{のう}、八王子、呪詛神、金神^{こんしん}など『記』『紀』神話には登場しない異貌の神々、あるいは太夫^{たゆう}、法者^{ほさ}、禰宜^{ねぎ}、博士^{はかせ}、陰陽師、神子^{みこ}……と呼ばれる神樂の担い手たちの姿とともに、これまでの「神樂」の認識を大きく転換させたといえよう。

こうした「中世神樂」の研究は、神樂の場で読み唱えられる「祭文^{さいもん}」の研究と不可分であった。従来「祭文」といえば、古代の儀式系祭文か、近世の「歌祭文」などの芸能化したものがメインで、「中世の祭文」は「継子あつかい」(五来重『日本庶民生活史料集成』第一七卷「解説」三一九頁)されてきたが、中国地方の神樂祭文、奥三河の花祭祭文、あるいは対馬の祈禱祭文、また土佐のいざなぎ流祭文は中世神樂の現場を究明する大きな視野を与えてくれたのである。それはまた、神樂と祈禱という二分法が通用しない「中世」の儀礼世界に分け入る方法を教えてくれたといえよう。

「神樂と祭文の中世」と題した本書は、近年の中世神樂、祭文の研究を踏まえつつ、さらにその次なる課題へと迫っていくことを目的に編まれるのである。以下「総論」として、「神樂」をめぐって井上隆弘が、「祭文」については斎藤英喜が執筆分担し、本書の研究史的な位置づけ、方法的な射程などを論じていきたい。さらに本書への導入として、各章の論考の簡単なコメントを付す。

折口信夫は「日本文学啓蒙」のなかで次のように述べている。

神楽は、神遊びから出て居る。先、神遊びの話から初めて行かう。あそびとは舞踊の事であるが、あそびとまひとは区別があった。あそびには必、奏楽が伴うて居た、といふことのほかに、まう一つの違ふ点があつて、其の方が大事な問題でもある。まひは踏み鎮めるのだが、あそびは、単に踏み鎮めるだけでなしに、色々の動作をして揺がす・魂をえぶる・魂をゆすぶつて完全に人間の身体に其外来魂を附着させるといふ、鎮魂の第一義があるのである。⁽¹⁾

神楽の本義が「神遊び」にあるという折口の言説は、まさに神楽というものの正鵠を射ている。彼はそこに神と人との直接的な関係を見ているのである。

その意味で神楽はたんなる「民俗芸能」ではない。神楽を論じるとき、まずその宗教性が問われなければならない。宗教といつても信仰が個人の問題に還元されるような近代のそれではなく、近代以前の、とりわけ中世の宗教世界が問題とされなければならないのだ。これが本書のモチーフである。

しかし神楽といつても、地方により実にさまざまな形態のものが伝承されている。それはその神楽が負っている歴史性なり地域性の反映である。神楽がそのような複雑な構成体である以上、その把握は一筋縄ではいかない。

これまでの神楽研究は学問として方法らしい方法を提示してこなかった。例えば、歴史的なレベルの違いを無視して、現前の神楽にあれこれの芸態的な特徴にもとづく分類を附して満足するとき「方法」が流通してい

る。こうした従来の神楽研究の限界を乗り越えるには、しっかりと方法にもとづく神楽の分析が必要である。以下、研究史の総括をふまえて、神楽研究の方法論確立のための試みを提示していくことにしたい。

一 研究史

(1) 「民俗芸能研究」成立の場所

神楽研究を問ううえで、まず研究史を振り返る必要があるが、そこにおいては「日本民俗学」の創始と呼応するように、いわゆる「民俗芸能研究」が成立した時空を問うことが必須である。

昭和初期、折口信夫・早川孝太郎は競い合うように奥三河や南信濃の地に分け入り、花祭、霜月祭の研究に成果を上げた。それは日本民俗学の黎明を告げる出来事であった。

しかしながら両者の立場には大きなへだたりがあった。

折口のそれはあくまで神楽の宗教性を追究することにあつた。明治以降の国家神道の展開のもとで「神祇非宗教論」が政府の公式見解とされ、神道は宗教性を否定されてしまった。折口の営為は、この神道の宗教性を問うということにあつた。彼はそれを三信遠の神楽における神と人との生き生きとした関係に見出そうとした。こうした折口の花祭・霜月祭研究の成果が、「山の霜月舞」(一九三〇年)や「大嘗祭の本義」(一九二八年)で定式化された「鎮魂論」である。その核心は「みたまのふゆ」という語に示されている。すなわち神は「ふゆまつり」において、外来魂を付着させて靈魂の復活再生と成長を行うというものであつた。⁽²⁾

今日的には、こうした折口鎮魂論の限界は明らかである。しかし折口が神楽の宗教性を問うことを神楽研究の中心にすえたということは、今日的に再評価されていることである。

一方早川であるが、その大著『花祭』(岡書院、一九三〇年)を見ると、それは詳細なモノグラフに終始して

いる印象がある。しかし、『早川孝太郎全集』を通覧すれば明らかかとおり、早川は当時昭和恐慌のもとで危機に瀕する農山村を再建する農村更生運動の担い手であった。したがって、早川の花祭研究は、危機に直面した農山村を再建するうえで共同体的紐帯の中核をになうべきものを解明することにはかならなかつたのである。

こうした「民俗芸能研究」成立の時代状況を考えるうえで、小寺融吉の存在は重要である。小寺は一九二五年より日本青年館における「全国郷土舞踊と民謡大会」（のちの「民俗芸能大会」）を指導し、一九二七年には柳田國男、折口信夫とともに「民俗藝術の会」を結成、雑誌『民俗藝術』を発刊した。

彼は「当時は価値が低いとして顧みられなかつた郷土舞踊（郷土芸能）を学問の枠組みに取り込み学術的に体系的に研究した」。その方法は西欧の民族学の進化主義の影響を受けたもので、「呪術から芸能へという流れの中に神楽や田楽を位置づける試みで」あつた。しかし、その中心に置かれたのは芸態研究であり、美学の方法にもとづいた「わざ」という身体技法への着目があつた。⁽³⁾

こうした小寺の活動は、日本青年館を中心とする農山村の青年団運動と結びついたのであつた。青年団運動とそれを担い手とする「民俗芸術」の振興活動は、昭和恐慌によつて深化する農村危機の中で重要視されるようになっていった。それは前述の早川の立場とも共通するものであつたらう。

(2) 本田安次の神楽研究の検討

この流れのなかから登場するのが本田安次である。本田は『山伏神楽・番楽』（斎藤報恩会、一九四二年）などに代表される東北地方の神楽研究を出発点として、折口・早川よりやや遅れて三信遠の神楽の踏査を行い、その成果は戦後『霜月神楽之研究』（明善堂書店、一九五四年）にまとめられた。その後も全国の神楽の調査研究を行い神楽研究の基礎を築いたといわれる。

本田の神楽研究の核心にあるものは、「こんな草深い田舎に、なぜこのような雅な芸能があるのだろうか」という驚きであったと思われる。その理想形は岩手県の早池峰神楽に見出された。そうした美意識は小寺融吉の「美学」を受け継ぐものであったと思われる。

しかしそれは神楽研究の方法たりえない。そこで折口の論から、その宗教性とは切り離された形で、説明原理が切り取ってこられることになる。

例えば本田安次は名著『神楽』（木耳社、一九六六年）において、神楽成立の基礎として「神楽以前」の一章を立てているが、その「一、神座を設けて神を呼ぶ行事」の項には次のように述べられている。

神の分身である人間は、その神を招ぶことも、神と交通することもできると信じてゐた。そこに色々の呪術も生じた。

神を招ぶには、先ず神の依るべき座を設けることが必要であった。然らば何が神座になるかといふことが大切な問題であつたらう。⁽⁴⁾

また「二、鎮魂の祭」の項には次のように記されている。

……岩戸の故事は一種の鎮魂、或は招魂の式であつたと思ふ。鎮魂とは、抜け出ようとする靈魂を身体の内府に、しっかりと収めようとする事、招魂とは、遊離した魂、或は新たな魂を招きよせようとする事である。⁽⁵⁾

一は折口が「髭籠の話」で提唱した「依代論」であり、後述する「神楽Ⅱかむくら（神の座）説」であること、また二は折口の「鎮魂論」によるものであることは明らかである。

「四、かぐらの語源」で本田は、志田延義が、「神楽の本体は採物である」として、神楽とは、「神の座と考へられる「採物」を持つて歌舞することと考へたい」としていることを、「さすがに鋭いと思ふ」などと評している。

そして、以下ではこれを承けて、「神座を設けて神を呼ぶ行事——主として鎮魂・招魂の行事——そのものが「かむくらの行事」であり」すなわち神楽であると結論づける。⁽⁶⁾

しかしここでは、神楽の本義として提出されていると思われる、「神楽Ⅱ鎮魂説」と「神楽Ⅲかむくら（神の座）説」⁽⁷⁾との関連はまったく明らかではない。要するに説明原理のつきはぎなのである。

ここでは後者の「神楽Ⅱかむくら（神の座）説」で説かれている「採物」を「神楽の本体」とする見解について一言しておこう。通例「採り物」とされるものには次の二通りある。一つは榊枝や御幣など、それを持って舞う巫者に神霊が依り付きしるしである。いま一つは剣や弓矢など、それを採って舞うことによつて悪魔をはらい祭場を清めるためのものである。⁽⁸⁾

志田ないしは本田の議論では両者の区別がまったく無視されている。そもそも榊枝や御幣などの「採り物」が儀礼の間を通して神の座でありつづけることがありうるのだろうか。それはその「神の座」がもはや形式にすぎないことを意味している。

本田の神楽研究における中心的関心事は、小寺から受け継いだ「芸態」にあつたといえよう。

以下、「神楽」において、本田は神楽の分類を試みている。よく知られる、「伊勢流神楽」「出雲流神楽」「巫女神楽」「獅子神楽」の四分類である。これも現前の神楽の芸態による分類であることは明らかである。

例えば「出雲流神楽」は、本田が島根県の佐陀神能さだしんのを西日本の神楽の典型と考えたことによるものである。これはいわゆる「採り物神楽」である。佐陀神能においては「七座の神事」という「採り物舞」によつて構成された祭式が神楽の本体をなし、次に行われる「神能」は「法楽」すなわち余興と考えられている。

こうした神楽祭儀のあり方は、近世における吉田神道の影響によるものである。本田の議論は、こうした歴史的な把握を無視して、現前の神楽の形態的特徴によつて、神楽にあれこれの規定を付与するものに他ならない。

こうした芸態論中心の神楽研究の限界を乗り越えるものは、神楽の宗教性をいま一度問うということにほかならない。そのために必須なものは「中世への視点」である。

(3) 「中世神楽」の発見——岩田勝・山本ひろ子の神楽研究の意義——

これについては、岩田勝・山本ひろ子という二人の論者の仕事について取り上げなければならぬであろう。

岩田勝の神楽研究

岩田勝の功績の第一は、神楽祭儀における男性の巫者である法者Ⅱ司霊者の役割について明らかにしたことにある。

岩田は日本の宗教史において「巫女なるものがこれまで不当なまでにとても重視されてきている」として、これにたいして男性の司霊者が神楽祭儀において神霊を操作する役割を重視した。すなわち神がかつて神言を託宣する神子にたいして、祭文を誦み神霊を強制するものとして司霊者Ⅱ法者の位置を明らかにした。そして、中世的な神楽祭儀はこの「法者」と「神子」のセットによって執行されたとしたのである。

一九七〇年代以降、岩田は、中国山地の神楽の研究に取り組むなかで、荒神神楽が中世以来の「名みよ」という同族共同体の祭祀の性格をもち、また神楽祭儀が中世的性格の両義的なはたらきに対応するものであることを明らかにした¹⁰⁾。すなわち近世神道以来の「神に悪い神はいない」という観念をくつがえし、中世の人々の身近にいるカミは強い崇る性質をもち、それを祀ることによって崇る性質を鎮め守護霊とする、ないしは境界の外に送り返すことを神楽祭儀の目的とする視点を打ち出した。

こうした神楽祭儀における神々のなかで重要な位置を占めるのは、記紀神話の高位の神ではなく、民俗学・民俗芸能研究が無視してきた荒神や土公神、牛頭天王などの密教、陰陽道の神、すなわち中世的な性格であった。

また岩田は、広島県東城町の戸宇と栃木家文書などの解説に取り組み、中世の神仏習合的な神楽祭文の宗教世界

I 陰陽道・密教・中世神話・アジア

第1章 梅田千尋「陰陽道祭文の位置——『祭文部類』を中心に——」

「祭文」の古態を探ると、平安時代から鎌倉時代に繰り広げられた陰陽道儀礼で使用された祭文に行き当たる。では、そうした陰陽道祭文と、民俗芸能系の神楽祭文とは、どのような繋がりがあるのだろうか。まさに未踏の領域に属する研究テーマだが、近世陰陽道史研究の梅田論文は、その課題にチャレンジした。中世の陰陽道儀礼で使用された祭文を集めた『諸祭文故実抄』『祭文部類』などの分析を通して、金神や荒神の信仰も取り入れ、中世神話の埒塙のなかで再鑄されていく「中世陰陽道祭文」の世界の豊かな広がりとともに、今後の研究のひとつの「座標軸」を提示してくれた。

(齋藤)

第2章 阿部泰郎「五形祭文と五蔵曼荼羅——中世日本の宗教的身体論の系譜——」

奥三河の花祭は、実はきわめて大規模な民間宗教儀礼の一端を集約した祭儀であった。この花祭が伝える祭文群のなかに、「五形のさいもん」と呼ばれる、人間の身体を宗教体系によって具さに分ち観念することにより病者を祈禱する祭文が伝えられている。中世顕密仏教の深奥から生みだされた、「五蔵曼荼羅」に集約される宗教的身体の観念体系が寺院の経蔵から出て、より広い世界において、「祭文」という実践的な儀礼テキストとして、どのように変貌をとげたのか。阿部論文では、中世宗教テキストのなかに手がかりを探る。

(井上)

第3章 斎藤英喜「大土公神祭文・考——曆神たちの中世神楽へ——」

中世の列島社会に繰り広げられた神楽には、『記』『紀』神話の神々とも、垂迹神、仏教神とも異なる神々が数多く登場する。それらの多くは陰陽道書『篋篋内伝』に由来が説かれる「曆神」たちである。斎藤論文は、古代の陰陽道儀礼に起源する「土公」の鎮めが、『篋篋内伝』の曆注の神話世界を媒介にして、神楽、祈禱の祭文によって、祀られる「土公神」へと変貌していく経緯を、奥三河の「大土公神経」と、いざなぎ流の「大どっくの祭文(祭文)」から読み解き、宇宙創造への遡及、あるいは世界の崩壊という中世神話を語りつつ、他方では神楽の祭文が、病人祈禱儀礼へと応用され、変容していく「現場」を明らかにした。

(斎藤)

第4章 北條勝貴「牽かれゆく神霊——東アジアの比較民俗からみる死者の浄化——」

環境や災害、生死観などのアクチュアルな課題に挑戦し続ける古代史研究の北條論文は、中世に展開した「死霊の鎮魂を目的とした祭儀」たる神楽、祭文の世界と、中国少数民族に伝わる「指路経」とを比較し、〈導き手による牽引〉が浄化・昇華の重要なモチーフであることを読み取る。そこから浄土神楽のもつ「観念的なもの」にたいして、「指路経」の道行きには、「民族・枝族の遷移の現実的記憶」の反映を指摘し、人類史における「定住と移動」という、壮大なテーマを提示する。

(斎藤)

II 生成する祭文の世界

第5章 星優也「神祇講式を招し祈らん——藺牟田神舞「初利の法者、初利の小神子」をめぐる——」

『神祇講式』とは、鎌倉期の中世神道説の展開のなかに登場した「貞慶作」が暗示される講式文である。もともとは仏教儀礼である講式が「神祇」を本尊として、衆生救済を祈る特異な儀礼テキストであるが、星論文は、

『神祇講式』が中世から近世の地方神楽の場で読まれることに注目し、とくに鹿児島県薩摩地方の「蘭牟田神舞」で読誦される意味を解説していくことで、中世的な岩戸神話の場面で神々を召還していく儀礼実践に繋がることを明らかにした。『神祇講式』が神楽祭文としての機能をもつという、驚くべき事実とともに、さらにその先には奥三河の「浄土入り」とも共振する問題を展望した。

(斎藤)

第6章 松山由布子「奥三河の宗教文化と祭文」

青少年たちの華麗な舞や鬼の乱舞で有名な奥三河の花祭であるが、かつては膨大な数と種類の祭文が重要な役割を果たしていた。松山論文は、「花太夫」のもとに伝えられた祭文の悉皆調査を通して、花祭や大神楽のみならず、病人祈禱などの儀礼においても、祭文が駆使されていた現場を明らかにし、その背後に活動していた「里修験」や尾張津島社との交渉関係を見出し、奥三河の地に創造された独自の「宗教文化」の姿に迫った。従来の「民俗芸能」の枠組みとは異なる奥三河の花祭の姿を浮き上がらせた論稿といえる。

(斎藤)

第7章 神田竜浩「物語化する祭文——日向琵琶盲僧の釈文「五郎王子」の事例から——」

琵琶盲僧は地神盲僧などとも呼ばれ、近世には地神経を読誦し、琵琶を弾きながら釈文を唱え、祈禱を行なった民間宗教者のことで、主に九州や中国地方などで活動していた。神田論文では、宮崎県延岡市長久山浄満寺の住職永田法順が唱える釈文「五郎王子」を取り上げた。永田は生前、もっぱらその語りが注目されたが、ここでは釈文について、その物語の検討をおこない、祭文は聞き手にわかりやすく語るだけでなく、自らの由緒を盛り込むなど、読誦する民間宗教者の立場に合わせて戦略的に改変されていくことを明らかにした。

(井上)

III 中世神楽の現場へ

第8章 池原真「静岡県水窪町草木霜月神楽に見る湯立ての儀礼構造——「玉取り」と「神清め」——」

三信遠地域の湯立神楽のなかでも、遠州のそれはシンプルな湯立儀礼に徹した地味な内容をもつが、この地域の神楽祭儀をとらえるうえで重要な意味をもっている。(玉取り)とは遠州水窪に特有な祭祀者集団による湯立であるが、池原論文はそれを「神を清めることによって立願の成就を願う湯立の核になる儀礼」と規定。同様の性格をもつ湯立祭儀が三信遠地域に広く分布し、この地域の湯立神楽の理解の鍵となるものであることを明らかにした。

(井上)

第9章 鈴木昂太「浄土神楽」論の再検討——『六道十三佛之カン文』の位置づけをめぐって——」

広島県庄原市に伝承される比婆荒神神楽は牛尾三千夫らによって、歌舞によって死霊を鎮め浄化する「浄土神楽」と指摘されてきた。しかし鈴木論文ではかつての「浄土神楽」と現在の「比婆荒神神楽」との間に連続性を見出すことには慎重であるべきだと考える。こうした視点から従来浄土神楽の重要な根拠とされてきた『六道十三佛之カン文』の死者の口寄せの祭文としての性格を検討して、これを神楽と結びつけて比婆荒神神楽の意義の根拠として用いたり、その祖型が浄土神楽であると論じたりすることには問題があると結論する。(井上)

第10章 梅野光興「いざなぎ流「神楽」考——米とバツカイを中心に——」

高知県香美市物部町に伝わるいざなぎ流は、神道・陰陽道・修験道などが混交した民間信仰で、大夫と呼ばれる民間宗教者が、家や村の神の祭り、さまざま祈禱など多様な祭儀に携わってきた。いざなぎ流の祭儀のほと

んどは祭文を使った「イノリ」（祈禱）であり、一般的な神楽に比べると異例なものである。梅野論文では、いざなぎ流の内容を検討して、ここでは、かつては神がかりの神楽が伝えられていたが、「ばっかい」（天蓋）が導入されることによって、儀礼の多様化が進んだという仮説を提示する。

（井上）

第11章 永松敦「山の神祭文と神楽祭文——狩獵祭文の解釈をめぐって——」

民間の山の神信仰と神楽に登場する神々の間には思想的に深い関係がある。近世中後期に膨大な量の山の神祭文が作成されるようになると、さまざまな神々が山の神という名称の下に一元化されるようになる。神楽の場合もさまざまな神々が、星の神・山の神・火の神の三神に集約され、竈の神として一元的に捉えられるという思想がつくられていく。このなかで神楽祭文においては、山の神とそれを祀る山人との仲介役は陰陽道的神格たる「玉女」であるが、獵師の世界では、その役割を獵師の女房が担っているのではないかとする。

（井上）

第12章 井上隆弘「九州における神出現の神楽と祭文」

九州南部の宮崎県、鹿児島県に分布する特徴的な仮面の神の神楽は、通説ではいわゆる「出雲流神楽」の垂流とされたが、これについては石塚尊俊の批判がある。井上論文ではこれをふまえ、これら仮面の神の神楽を九州固有の性格をもつ「神出現の神楽」ととらえ直した。そして、それらが伝える祭文あるいは祭文に準じる性格をもつ言い句のうち、宮崎県椎葉村の嶽之枝尾神楽と鹿児島県旧祁答院町の蘭牟田神舞における荒神の言い句に注目して、それが中世の荒神信仰をよく伝えるものであることを明らかにした。

（井上）

〔研究ノート〕 ジェーン・アラシエフスカ「青ヶ島における中世的病人祈禱祭文といざなぎ流との関係について」

イギリス在住の研究者であるジェーン・アラシエフスカは、かつて本田安次らによる調査で、その中世的な信仰世界を垣間見せてくれた八丈島、青ヶ島への、複数にわたるフィールドワークを通して、「祭文」の伝来の実態とともに、これまで類似点は指摘されてきたものの具体的な分析はなされていなかった、いざなぎ流の祭文との比較・検討を行った。とりわけ、青ヶ島といざなぎ流の「呪詛祭文」の表現の類似点の分析などは、今後の中世の神楽・祭文研究にとつての重要な課題となるだろう。

(斎藤)

〔資料翻刻と解説〕 渡辺伸夫「対馬の新神供養——「綱教化」と「提婆」を中心として——」

対馬の新神供養は、単に「かみ」とも呼ばれた先祖祭の一つで、中世後期から近世幕末期にかけて、法者と神子によって執り行われた。さまざま祈禱と祭文と舞からなる大掛かりな霊祭神楽であった。これは他の法者の行う祈禱と同様に、弓弦を篠竹で打ちならしながら祭文を誦む、いわゆる弓祈禱であった。この新神供養については、ほとんど解明されていない。渡辺による新神供養の「綱供」「綱教化」「提婆」などについての資料翻刻と解説は、霊祭神楽・浄土神楽の解明にとって画期的な意義をもつものである。

(井上)

三年まえの春、久しぶりに再会した井上隆弘氏と、鴨川ぞいの床のジャズバーのテーブルで交わっていた何気ない会話……。思えば、それが本書の出発点だった。

そもそも、われわれふたりは、神語り研究会の同人だった。「神語り研究」といえば、いまや知る人は知る、伝説的な存在かもしれない。山本ひろ子氏を主宰に、七十年代の〈学と知〉の反乱の時代を受け継ぎつつ、アカデミズムとは異なる地平をめざした研究者集団だ。そこでの共同研究のテーマが、奥三河の花祭だった。これまで正面から扱われてこなかった祭文の解説、そこから浮かんでくる牛頭天王や大土公神、荒神など異神たちの信仰世界、あるいは華麗な舞がもつ象徴的な意味の分析へのめりこんでいった。だが研究会も『神語り研究』第五号を刊行して後、いつか解散した。そして歳月は流れ、われわれはそれぞれ別々の道を歩んでいた……。

そんなふたりがひよんなことで再会し、最近の祭文や神楽をめぐる研究状況を話し合ううちに、若手の研究者や、あるいは異分野の研究者をも巻き込むような、先鋭的な論文集を作りたいという気持ちが始まり、やがて話はどんどん進んでいった。さらに二〇一四年の春、「いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会」が主催した、いざなぎ流の祭文をめぐるシンポジウムが、本書を具体化してくれる大きな役割をはたしてくれた。

かくして、二〇一五年の暑い夏の日、京都の某会館に、われわれふたりが「ぜひ書いてほしい」と呼びかけた研究者の方々に集合していただき、論文集の主旨とともに、それぞれが書きたいテーマや課題を提示して、議論することを通して、ほぼ全員の執筆によって成ったのが、『神楽と祭文の中世』を名乗る本書である（なお、神語り研究会の同人で、若くして急逝した池原真氏の論稿を再録できたことは、なによりも嬉しいことだ）。

ここに結集した論文たちは、従来の民俗芸能研究の枠組みでは捉えきれなかった、列島社会の「中世」に息づいていた神楽の現場、そして祭文の信仰世界を描き出してくれているはずだ。もちろん本書が、どれほど研究史を進展させたかの判定は、読者の方々にお任せするしかないが。

最後に、編者ふたりの無理難題に応えてくれた執筆者の皆さま、そして献身的な力をもって、編集実務にあたってくださった思文閣出版の三浦泰保さんに、最大級の感謝を申し上げます。

斎藤英喜

二〇一六年十月 秋の深まる京都で

Jane Alaszewska (ジェーン・アラシェフスカ)

1972年生。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 SOAS 音楽学科民俗音楽専攻博士過程修了。

ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 SOAS 日本宗教センター研究員。

ジェーン・アラシェフスカ、金田章宏編『八丈島古謡：奥山熊雄の歌と太鼓』（笠間書院、2005年）、「Edo Traditions on the 'Islands of Exile': The Narrative Ballads of the Southern Izu Islands」(『World of music』46-2号、2004年)、ジェーン・アラシェフスカ、アンディ・アラシェフスカ共同執筆「Purity and Danger: shamans, diviners and the control of danger in premodern Japan as evidenced by the healing rites of the Aogashima islanders」(『Health, Risk and Society』17, 3-4号、2015年)。

渡 辺 伸 夫 (わたなべ・のぶお)

1942年生。早稲田大学商学部卒業。椎葉民俗芸能博物館神楽研究所 (所長)。

『椎葉神楽発掘』（岩田書院、2012年）。

翻訳者紹介

Giorgio Premoselli (ジオルジョ・プレモセリ)

1983年生。佛教大学文学研究科仏教文化専攻博士課程満期退学。佛教大学文学研究科仏教文化専攻研究員。

「陰陽道神・泰山府君の生成」(『佛教大学大学院紀要』42号、2014年)、「漫画と神話——『蟲師』」(斎藤英喜編『神話・伝承学への招待』思文閣出版、2015年)、「陰陽道の祭祀と呪術」(『陰陽師の世界』別冊宝島2443号、2016年)。

松山由布子（まつやま・ゆうこ）

1984年生。名古屋大学文学研究科博士課程後期課程修了（文学）。名古屋大学文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター研究員。

「奥三河の民俗芸能と文学記録」（『愛知県史 別編 文化財4 典籍』愛知県、2015年）、「花太夫所蔵文献に見る奥三河の宗教文化——宗教テキストの特徴と普遍性をめぐって」（『説話・伝承学』第23号、2015年）、「奥三河の宗教文化とその担い手」（地方史研究協議会編『三河——交流からみる地域形成とその変容——』雄山閣、2016年）。

神田 竜 浩（かんだ・たつひろ）

1972年生。中央大学文学部卒業。独立行政法人日本芸術文化振興会勤務。

「彦岐神楽の荒平舞」（『民俗芸能研究』第51号、2011年）、「山代本谷神楽」（『民俗芸能』第92号、2012年）、「下柴彼岸獅子舞」（『民俗芸能』第92号、2012年）。

池 原 真（いけはら・しん）

1953年。同志社大学文学部卒業。2012年逝去。

「調査報告・草木霜月神楽——静岡県磐田郡水窪町草木」（『神語り研究』第3号、春秋社、1989年）「草木霜月神楽の祭祀組織と祭祀形態」（『神語り研究』第5号、岩田書院、1999年）、「山梨県上野原市秋山村無生野の大念仏〈道場入り〉の世界」〔1〕〔2〕（『年間藝能』第16号・第17号、2010年・2011年）。

鈴木 昂 太（すずき・こうた）

1988年生。総合研究大学院大学日本歴史研究専攻後期博士課程在籍中。

「比婆荒神神楽の時空間：神楽場の民俗誌」（『民俗芸能研究』60号、2016年）、「研究公演「石見大元神楽」」（『総合研究大学院大学文化科学研究科 学術交流フォーラム2014 活動報告書』2015年）。

梅 野 光 興（うめの・みつおき）

1962年生。大阪大学大学院文学研究科前期課程修了。高知県立歴史民俗資料館学芸員。

「解釈の技法・記憶の技法——高知県大豊町の蛇淵伝説——」（小松和彦編『記憶する民俗社会』人文書院、2000年）、「いざなぎ祭文の誕生」（斎藤英喜編『呪術の知とテクネー』森話社、2003年）、「妖怪譚——土佐の河童伝承を事例として——」（斎藤英喜編『神話・伝承学への招待』思文閣出版、2015年）

永 松 敦（ながまつ・あつし）

1958年生。総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程修了。宮崎公立大学教授。

『九州の民俗芸能——海と山と里と 交流と展開の諸相——』（鈺脈社、2009年）、『狩猟民俗研究——近世猟師の実像と伝承——』（法藏館、2005年）、『狩猟民俗と修験道』（白水社、1993年）。

執筆者紹介（収録順、*は編者）

* 斎藤英喜（さいとう・ひでき）

1955年生。日本大学大学院文学研究科博士課程満期退学。佛教大学歴史学部教授。
『いざなぎ流 祭文と儀礼』（法藏館、2002年）、『増補 陰陽道の神々』（思文閣出版、2012年）、
『陰陽師たちの日本史』（角川選書、2014年）。

* 井上隆弘（いのうえ・たかひろ）

1947年生。秋田大学鉱山学部鉱山地質学科中退、法政大学経済学部卒業。佛教大学総合研究所嘱託
研究員。
『霜月神楽の祝祭学』（岩田書院、2004年）、「南九州の神楽における荒神」（『民俗芸能研究』第56
号、2014年）、「三信遠における死霊祭儀」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第142集、2008年）、
「神楽と死者のまつり」（『佛教大学総合研究所紀要』第23号、2016年）。

梅田千尋（うめだ・ちひろ）

1970年生。京都大学文学研究科博士課程日本史学専修単位取得退学（文学）。京都女子大学文学部
准教授。
『近世陰陽道組織の研究』（吉川弘文館、2009年）、「近世の神道・陰陽道」（『岩波講座日本歴史』第
12巻、岩波書店、2014年）。

阿部泰郎（あべ・やすろう）

1953年生。大谷大学大学院文学研究科博士後期課程（仏教文化専攻）単位取得退学。名古屋大学文
学研究科（2017年4月より人文学研究科）附属人類文化遺産テキスト学研究センター教授・セン
ター長。
『湯屋の皇后——中世の性と聖なるもの』（名古屋大学出版会、1998年）、『聖者の推参——中世の声
とヲコなるもの』（同、2001年）、『中世日本の宗教テキスト体系』（同、2013年）。

北條勝貴（ほうじょう・かつたか）

1970年生。上智大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程単位取得満期退学。上智大学文学部准
教授。共編著『環境と心性の文化史』上・下（勉誠出版、2003年）、共編著『寺院縁起の古層——
注釈と研究——』（法藏館、2015年）、共著（北原糸子編）『日本災害史』（吉川弘文館、2006年）。

星 優也（ほし・ゆうや）

1991年生。佛教大学大学院文学研究科歴史学専攻博士後期課程在籍中。
「荒木株と株講——記念碑・系図の祭祀と系譜の世界——」（『福知山市三和町草山の民俗——2013
年度「歴史文化フィールドワーク調査報告書」——』2014年）、「『偽史』が創り出す民俗——『東
日流外三郡誌』を中心に——」（斎藤英喜編『神話・伝承学への招待』思文閣出版、2015年）、「『神
祇講式』の流布と展開」（『鷹陵史学』第42号、2016年10月）。